

十腰内 1遺跡の青玉攻玉と壺に収納された青玉の流通

鈴木克彦

はじめに

青玉（緑色凝灰岩製小玉）が、つがる市亀ヶ岡遺跡から多く出土することは古くから注目され、その石材（青石）産地に青森県鰯ヶ沢町大戸瀬附近の海岸が比定された（佐藤伝蔵 1901）。

未成品、原石や道具類を多く出土する亀ヶ岡遺跡は、翡翠玉と青玉の亀ヶ岡文化圏最大の攻玉遺跡である（青森県 1974）。青玉の石材は、グリーンタフ地帯である津軽地域日本海側一帯で採集できる。何処でも採集できる反面、採集地を特定できない。石材の硬度が極めて低く見た目も決して美しいとは言えないが、その攻玉遺跡は、現状では亀ヶ岡遺跡、中泊町五月女苑遺跡（筆者確認）外ヶ浜町宇鉄遺跡（三厩村 1996）など津軽半島地域に限られている。

弘前市十腰内 1 遺跡（青森県 1999,2001）の出土資料を再観察したところ、青玉の原材料、成品、未成品に加えて攻玉に特有な石錐等の道具類を確認でき、青玉攻玉が行われていることが判明した。また、この遺跡では多数の青玉が収納された壺形土器が出土している。縄文時代においてそのような事例は、筆者の知るところではこれまで全国に 2 例知られていたので、これで 3 例目になる。いずれも亀ヶ岡文化圏内の事例である。

そこで、十腰内 1 遺跡の出土資料に基づいて、津軽地域の青玉攻玉と流通に関連する幾つかの問題を考察しておきたい。

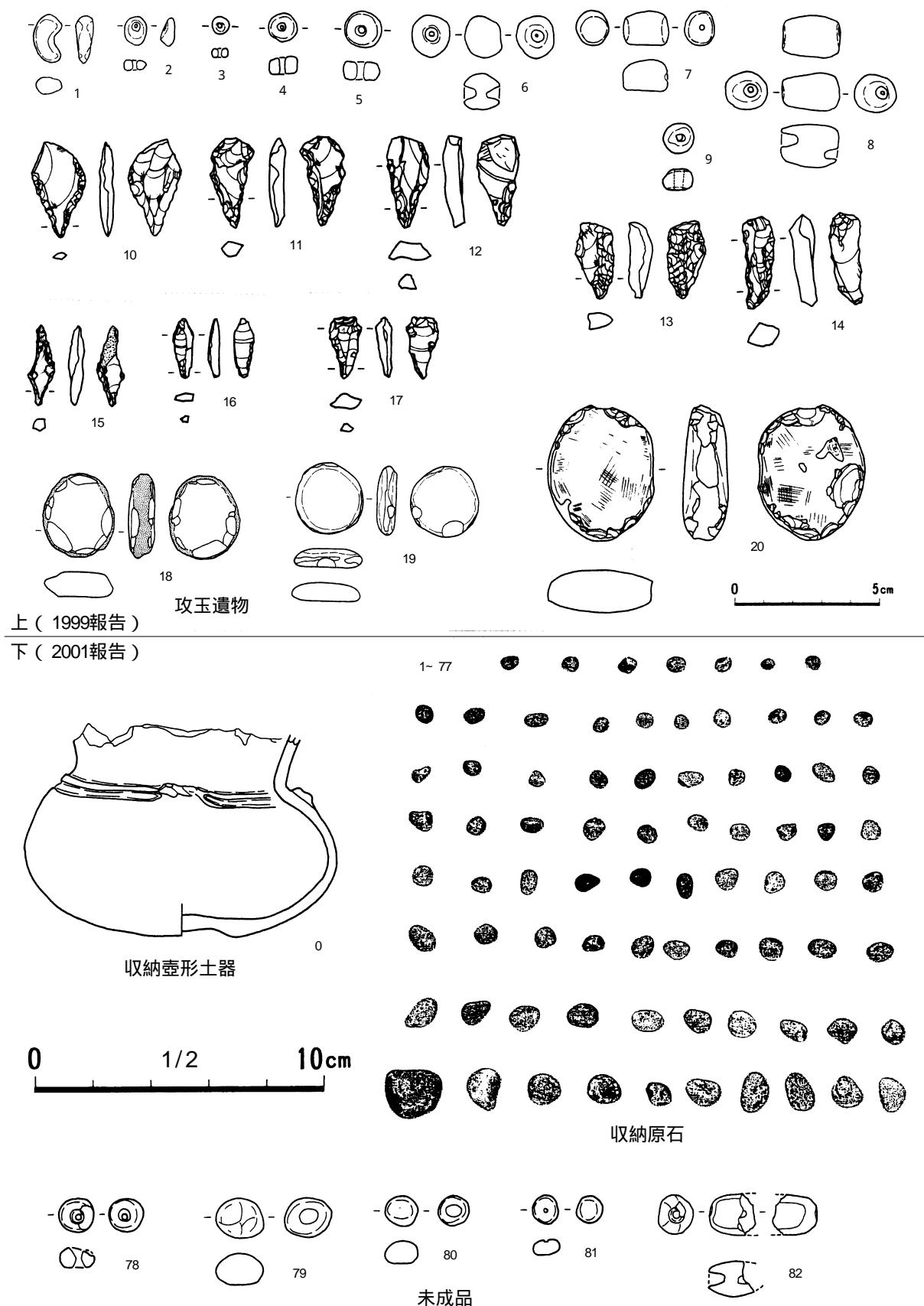
2 弘前市十腰内 1 遺跡出土資料

遺跡の発掘調査は 2 カ年に渡って行われ、いずれも少量ながら青玉、その未成品、原石等と壺形土器に収納された青玉が出土している（第 1 図上：1999 報告書、下：2001 報告書）。出土遺物から緑色凝灰岩製の小玉、平玉、縄文管玉を製作していたものと推定される。

資料の絶対量が少なく、津軽地域の既存攻玉遺跡に較べると小規模である。遺物が出土した場所は、遺跡主体部より一段低い沖積河岸段丘である。小規模攻玉であっても、考古学的な意義は少なくない。

第 1 次の発掘（第 1 図上：1999 報告書）では、30 数点の原石等が出土しているらしいが、図示されているものはその一部である。大洞 B C 式期の第 3 号住居跡から緑色凝灰岩製曲玉未成品（1）、第 1 号土坑から石剣破損品と共に緑色凝灰岩製小玉（2）、包含層から土玉 1 点（9）、青玉 3 点（3-5）、小玉と縄文管玉未成品 3 点（6-9）、緑色凝灰岩等の小石原石 30 余点、その他に攻玉工具と思われる珪質頁岩、鉄石英、玉髓製の石錐未成品（10-17）、閃綠岩、安山岩製の敲石、砥石（18-20）等が出土している。

包含層には大洞 B 式土器から大洞 A 式土器まで出土しているので攻玉諸遺物の時期を特定できないが、第 3 号住居跡（大洞 B C 式期）から同じ石材の曲玉未成品が出土しているので同時期の可能性があると思われる。また、第 1 号土坑から出土した青玉は、この遺跡で自給自足したものを副葬したものではないかと思う。



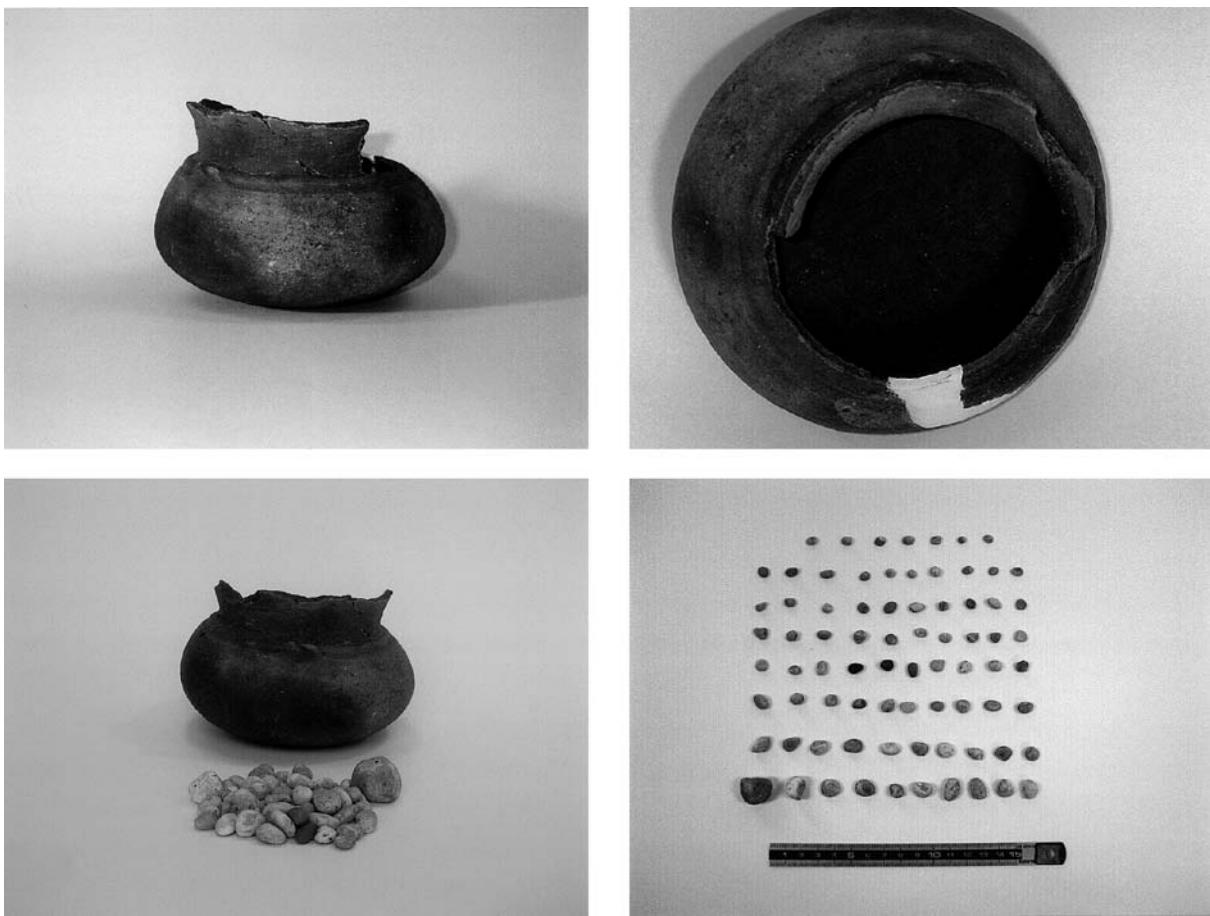
第1図 青森十腰内 墓跡出土遺物

第2次の発掘（第1図下：2001報告書）では、IF-70グリッドから一括廃棄された多数の土器群や緑色凝灰岩小礫33点余、緑色凝灰岩製小玉（78）、未成品（79-82）、赤色顔料の原材料である赤鉄鉱破片7点などと共に、大洞BC式土器の内外面に赤色顔料が塗布された精製壺形土器（0）に収納されて未成品を含む77点の緑色凝灰岩原石が出土している。特に、注目されるのは青玉収納土器である。口縁部の大半を欠く精製広口壺形土器（現器高7.0cm、胴部10.9cm、上げ底径0.8cm）は、無文で肩部に2条の平行沈線文を施しB突起が付き、内外面、特に内面に赤色顔料が付着している。

こういった一括土器群の出土状態は亀ヶ岡パターンと呼ばれるが、纏まりが薄くそれとも少し違うように思われる。しかし、亀ヶ岡パターンにこういうケースがありうるのかも知れない。

この遺跡全体の構造、遺物については、発掘調査報告書を参照して欲しい。この遺跡の発掘調査では攻玉という観点を欠いているため、全面的に出土資料を見直すと細かい攻玉石錐などがもっと出土しているのではないかと予測される。しかし、青玉については見落としが考えられないので、掲載遺物から判断すれば攻玉の規模は小規模である。

3 津軽地域の青玉攻玉について



小規模ながら十腰内1遺跡において、緑色凝灰岩製すなわち青玉とその原石、未成品等が発見され明確に攻玉が行われていたことが判明した意義は極めて大きい。

従来は、津軽地域の半島部において上記3遺跡で青玉攻玉が確認されていただけである。この遺跡は、岩木山北麓に位置し、これで少なくとも津軽平野を取り巻く地域で何らかの形で青玉攻玉が行わ

れていたことが分かる。

冒頭に述べたとおり緑色凝灰岩は、グリーンタフ地帯では何処でも採集できる。筆者の知見によると下北半島にも類似する石材が小礫として採集されており、南部地域の三戸町泉山遺跡（青森県 1996）においては緑色凝灰岩攻玉が行われている。しかし、それぞれの石質、色調は微妙に異なる。

グリーンタフ地帯は北海道日本海側にも及んでいるので、原石の産地を考古学及び岩石学的に特定して絞り込むことは現状では不可能である。逆に言えば、グリーンタフ地帯では何処でも原石を入手し、入手できれば軟質故に石器、石製品製作技術を持っていれば何処でも製作が可能であるということである。しかしながら、それを利用した玉作りを行っている遺跡は現状では秋田県や北海道日本海側に確認できず、確認できているのは山形県玉川遺跡と津軽地域の諸遺跡である。

津軽地域では、緑色凝灰岩は何処でも採集でき、それを利用した青玉作りは亀ヶ岡遺跡、宇鉄遺跡など津軽半島で複数知られている。言うなれば、津軽地域特有の玉作りと言ってよく、津軽地域では最も多く出土する玉と原石である。津軽地域の特徴は軟質な緑色凝灰岩を利用していることである。

筆者の経験では、亀ヶ岡遺跡を発掘した際に多量に緑色凝灰岩原石、未成品が出土したために周辺を踏査したところ、岩木山北麓から流入する山田川下流域、出来島海岸でも緑色凝灰岩原石を採集できた。山田川の河床に少量発見できることから、侵食されたものが下流に流されてきたものではないかと想定されたので、大分岩木山北麓を踏査したが、何時も見つけるのは黒曜石原石ばかりで緑色凝灰岩の堆積層は確認していない。しかし、平野部の常盤村周辺の分布調査でも緑色凝灰岩小礫自然石を確認しているので、径 1 cm 程度の小礫は津軽平野周辺に堆積層として存在するものと予想している。そのように津軽地域では、決して珍しい石材ではない。石材自体は比較的軟質で、風化しているものが多く、加工は難しくないと思われる。

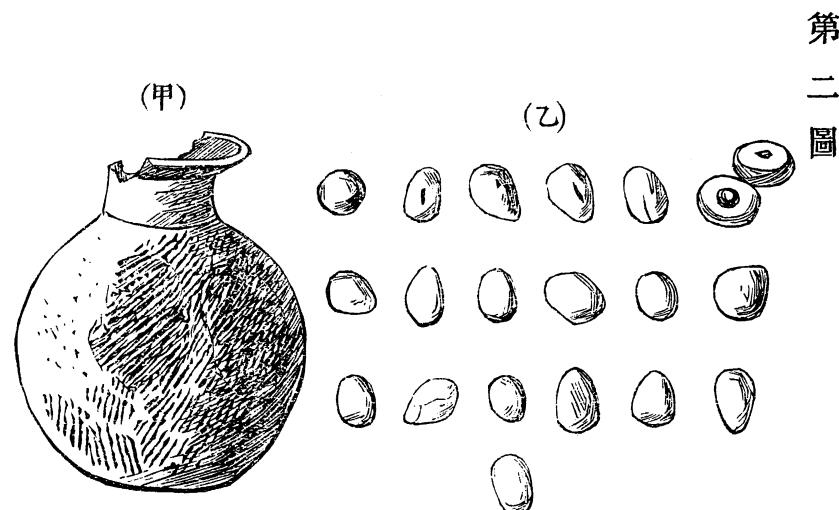
軟質な石材ゆえに、亀ヶ岡遺跡に見られる翡翠玉攻玉と違って筋砥石を必要とせず、専用の手持ち砥石が用いられている。石錐も通常の石錐と違って玉髓、瑪瑙のフレイクを細かく割った攻玉専用石錐が用いられ、亀ヶ岡遺跡や宇鉄遺跡で多量に発見されているが、少量の場合はそういう観察眼で遺物を探さなければ単なる小さなフレイクとして見落としやすいものである。99%は打割しただけのフレイクで、極僅かに先端部が磨耗しているものが亀ヶ岡遺跡（青森県 1974）で発見されている。成品は石針になるものだと想定しているが、亀ヶ岡遺跡でも石針の成品は確認されていない。

筆者は、こういう在地性の軟質青玉は、基本的に地域内の自給自足を目的にする攻玉だと考えている。宇鉄遺跡では、包含層から多量な手持ち砥石、攻玉専用石錐と青玉（149点）、未成品（95点）、土坑墓から 149点の青玉が出土している。多量な道具類の出土を見ると自給自足だけと考えられないが、亀ヶ岡遺跡のように大規模攻玉では、自給自足のほかに成品として他の周辺の遺跡や遠隔な地域に対して流通の対象にしていたのではないかと考えている。

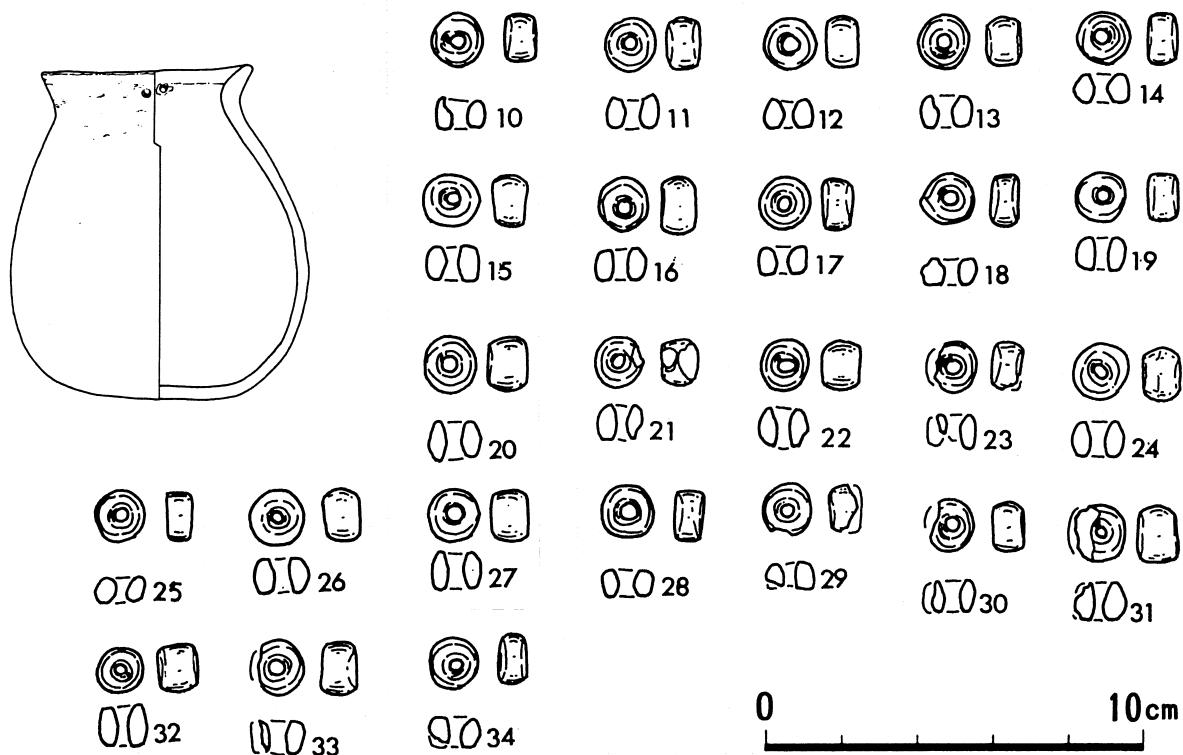
十腰内 1 遺跡では、小規模攻玉なので恐らく自給自足されたもの、自給自足するために青玉原石を他所から入手していたものではないかと想定される。そのことを物語るのが、壺形土器に収納された 77 点の原石であろう。

4 壺形土器に収納された玉・原石の事例

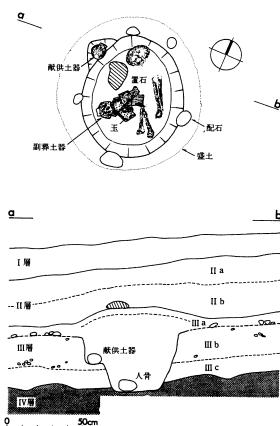
縄文時代には容器である土器に、器種による本来の機能とは別に、石器、アスファルト、漆、赤色顔料など様々な物質が入れられた事例がある。容器である以上当然のことには相違ないが、通常は液体、固体物にしろ有機物を入れるものなので当然遺存しない。無機物を入れた場合にのみ遺存するので、それによって土器の本来の用途を規定することはできない。しかし、多様な用法を知ることができ、



第2図 青森県つがる市亀ヶ岡遺跡



第3図 北海道洞爺湖町高砂貝塚



第4図 高砂貝塚G 10墳墓

保存、保管の他に運搬の機能があった可能性を知ることができる。

これに紹介する玉や原石が土器の中から出土した事例はそのように考えられ、筆者の知るところでは以下に紹介するとおり全国に2例、これで3例目となり、いずれも亀ヶ岡文化圏内の事例である。使われている土器は、亀ヶ岡式土器である。

土器に収納された玉類として報告されているものに、青森県つがる市（旧木造町）亀ヶ岡遺跡（若林勝邦 1896）、北海道洞爺湖町（旧虻田町）高砂貝塚（札幌医科大学 1987）の事例がある。

亀ヶ岡遺跡の事例（第2図、若林勝那 1896）は、大洞C 1式土器と思われる粗製壺形土器に20点の平玉と原石が入れられていたものである。古い時代の報告でもあり詳しい記述はないが、「佐藤部氏から聞くところによれば陸奥亀ヶ岡より発見し、珠玉を製造しかけたる礪磧

を蓄え、神田孝平君の蔵に帰す云々」と記されているので、恐らく不整形な原石の形状等から判断すれば緑色凝灰岩製の平玉、未成品と原石だと推定される。

洞爺湖町高砂貝塚の事例（第3、4図、札幌医科大学 1987）は、G 10号墳墓に副葬された亀ヶ岡式壺形土器に25点の緑色凝灰岩製の小玉とその破損品5点が収納されていたものである。その壺形土器は人骨腰部右脇に出土している。亀ヶ岡式と思われる壺形土器の器高は14cmで、研磨された無文土器である。口縁部に向かい合わせに孔が空けられている。小玉の直径は、8.5~9mm、厚さ4.5~7.2mmのものである。

共伴関係にある壺形土器には球形の体部に縦位の条痕文が施文され、口頸部に無文帯を持つ大洞C 2式土器と思われる所以、その無文壺形土器も同時期と思われる。

十腰内1遺跡の事例は上述したとおり、包含層から77点の青玉原石を収納した内面に赤色顔料を塗った壺形土器が34点の緑色凝灰岩原石、1点の青玉未成品、赤鉄鉱破片などと共に土器群に共伴して出土している。この出土状態が何を意味しているかは不明であるが、赤色顔料を塗った精製壺形土器に收められていたので、単に廃棄したものとだけ解釈することができないであろう。

5 壺形土器に収納された玉原石の重要性

いずれも、縄文時代晚期亀ヶ岡文化の事例であることは興味深い。縄文時代以外なら少なくないし、玉以外なら縄文時代に石斧などが収納された事例がある。しかし、玉の収納事例は、縄文時代では全国でもこの3例だけであろう。

まず、これらに共通する事項は、：縄文時代晚期の亀ヶ岡文化、：亀ヶ岡式の壺形土器に収納、：緑色凝灰岩製小玉、：未成品、原石、：他の遺物が入っていない、ということである。

次に、これらの事例に見られる特徴として、：十腰内1遺跡の壺形土器の内外面に赤色顔料が施され、特に見えない部分の内面には多量に塗られている、：高砂貝塚は土坑墓に人骨と共に副葬されている、という特殊性を上げることができる。

更に、亀ヶ岡遺跡、十腰内1遺跡では未成品、原石が収納されているように、この二つの遺跡では緑色凝灰岩製小玉の製作が行われていることに対し、高砂貝塚は消費として副葬されている違いが認

められることを指摘できる。

こういったことなどから、これらの事例は、玉と壺形土器と流通の問題に集約して止揚することができるであろう。

緑色凝灰岩製小玉は、現在のところ亀ヶ岡、宇鉄遺跡など津軽半島の独自な攻玉圏を形成している地域を中心に主に日本海側に出土する。特に、北海道では札苅遺跡など海峡附近に少量出土するが、噴火湾沿岸以北には現状では出土していないので高砂貝塚は北端になる。

高砂貝塚の事例は、緑色凝灰岩製小玉は以北に出土していないので、その最大限の分布範囲を示す消費流通領域を物語る。しかし、報告書に掲載されている土器を見る限りでは、少なくとも運搬者とその集団は津軽地域の人々と考えにくく、恐らく道南部の集団による間接的な流通、運搬により齎されたものと推測する。では、何故間接的に流通しているのであろうか、玉だけが流通しているのであろうか、流通の背景に何が秘められているのだろうか。それは、交流なのだろうか、流通なのだろうか。

口が窄まる器形なので内容物が零れにくいという理由があるにせよ、本来は壺形土器は運搬容器でない。特に、赤色顔料を塗った壺に入っていることにはそれなりに理由があったのではないかと考えられる。それだけ貴重な特別な存在の物として、大事に扱われたのであろう。墓に副葬されていることは、そのことを物語る。では、何故玉が本来の用途である装身具として死者に佩用されず、壺に入れられて副葬されたのであろうか。共伴した土器は、類似するものは津軽地域にも見られない訳でないが、どちらかというと北海道南部に多い。しかしながら、筆者はまだ見学して観察した訳でないのと、予察に止める。

流通という問題では、亀ヶ岡、十腰内遺跡は圏内の津軽地域における狭い地域間の近距離流通、高砂貝塚は圏外の遠距離の運搬と流通として別けて捉えられる。前者では亀ヶ岡遺跡が亀ヶ岡文化圏の最大の攻玉遺跡として知られ、十腰内1遺跡での現状の小規模な攻玉の比でないので、大規模攻玉遺跡から同心円的な領域内の流通、運搬の範囲で捉えられよう。しかしながら、この原石は、十腰内遺跡周辺に存在しないと決め付けることはできないことと、亀ヶ岡遺跡から齎されたことの証明ができる。むしろ、供出源を特定しないで、大事な玉の原石が壺形土器に収納されて流通されていたという事実を確認することに止めるべきであろう。

6 津軽地域における青玉の流通システム

さてから亀ヶ岡遺跡の発掘を通して亀ヶ岡文化圏における翡翠玉及び青玉の問題として、攻玉と流通を如何に実証して考えるべきか思考してきた。翡翠玉及び青玉の攻玉に関しては、もはや十腰内1遺跡の発見を待たずとも実証化することは可能である。後は物質的には明確な攻玉専用の石針の発見を待つだけかもしれない。

さて、本稿では津軽地域特有な緑色凝灰岩の原石及び青玉攻玉による成品の流通問題として、特にその原石の流通システムを仮説化し問題を今後に繋げておきたい。

まず、その原石は津軽地域に限らず日本海側一帯では何処でも比較的容易に採集することができる。しかし、現状では青森県に次いで多く出土する秋田県にその攻玉遺跡がまだ知られていない。換言すれば、津軽地域にしか知られていない青玉攻玉を成立させる原石の入手の仕方すなわち流通システム

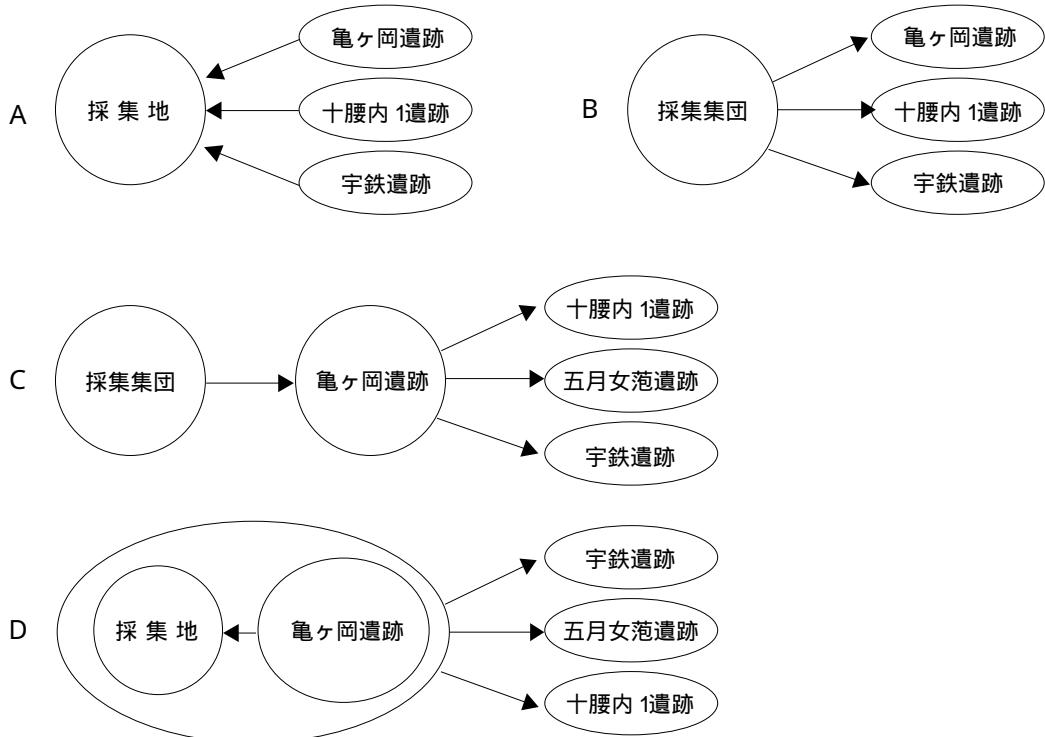
は、津軽地域がモデルになるだろう。

その場合、第5図のとおり四つのケースが考えられる。一つは、A：各々の遺跡が独自に採集している可能性があることである。その場合、亀ヶ岡遺跡や十腰内遺跡の工人が壺形土器に拾い集め、その青玉原石を保管したことになる。

次は、B：採集専門者や臨時の採集者（採集集団）が存在し、そこから攻玉遺跡に原石を持ち込んでいる可能性が想定されることである。その場合、採集集団が壺形土器を運搬容器に用いたか、採集集団から入手した壺形土器と原石を保管したことになる。

C：津軽青玉攻玉の中核は、翡翠玉攻玉を行っている亀ヶ岡遺跡であると仮説することが可能性として高いので、亀ヶ岡遺跡の攻玉工人が採集集団から一手に青玉を収集し、そこから分配されている可能性が考えられることである。その場合、亀ヶ岡遺跡ではこれから運搬される容器と原石であり、十腰内遺跡では改めて自らの壺形土器の容器に移し替えたか、そのまま保管したことになる。

D：亀ヶ岡遺跡の攻玉工人が自ら採集し、その原石を他の遺跡の自給自足する攻玉工人に分配している可能性がある。その場合、亀ヶ岡遺跡の工人は採集原石を壺形土器に入れて保管していることになる。



第5図 想定流通システム

以上は、想定問答でしかないが、壺形土器は運搬ないし保管容器にされていることになる。

しかし、赤色顔料塗りや口縁部が欠損した壺形土器を運搬容器にすることが現実的であろうか。運搬する道具は有機質の素材の容器が考えられよう。とすれば、保管したものではないかと考えるべきであろう。では、何故、成品よりも原石や未成品を保管するのであろうか。

実は、まだ議論された試しがない玉の着装、保管、管理の問題については、別稿に言及している（鈴木克彦 2008『玉文化』5号に掲載予定）ので、ここでは触れないが、成品としての硬玉は組織として保管されていない。保管されているのは、上述のとおり事実として原石及び未成品である。このことは、玉を自給自足するための待機行為と理解される。十腰内1遺跡の第1号土坑から出土している青玉は、この遺跡で製作された玉であろう。

入手及び流通のシステムを考える上で、絶対的な条件は、出土量ではないかと考える。

五月女泡遺跡については不明だが、十腰内1遺跡、宇鉄遺跡では現状では100点ほど、極狭い発掘面積ながら亀ヶ岡遺跡では数えられないほど多量で、実際数えていないが千点以上に及ぶはずである。青森県立郷土館に玉を寄贈した地元の小島氏の談によれば、筆者が想定していた以上の広範囲な現在の水田下に玉が出土するとされ、筆者の発掘経験からでも想像を遥かに超える量が包蔵されているはずである。これらのことから、亀ヶ岡文化圏最大の翡翠玉攻玉遺跡としてDのケースを想定することが、現状では妥当ではないかと考えている。蛇足ながら、小島氏寄贈の玉及び攻玉関連遺物のパステル形石製品についても『玉文化』5号に掲載している。

高砂貝塚の資料調査を行っていないが、実測図からの判断では亀ヶ岡遺跡の攻玉成品と形態が異なるように思われる。その推定が正当であれば、亀ヶ岡遺跡以外の攻玉工人による成品となる。これらは、実見した上で改めて問題にしたい。山形県玉川遺跡にも青玉が出土しているが、亀ヶ岡遺跡のものとは断定できなかつたし、そのほかの遺跡から出土している青玉も製作地を特定することは少なくとも筆者の力量では不可能に等しい。

このように、青玉攻玉は遺跡及び地域単位の自給自足攻玉が原則にあって、原材料の入手と成品の流通には分業的攻玉中枢遺跡（亀ヶ岡遺跡）が元締め的な重要な役割を担っていたことを想定する。そして、十腰内1遺跡などから大規模な遺跡なら津軽地域においては小規模青玉攻玉が一般的に行われていたのではないかと考える。

参考文献

- 青森県教育委員会 1974 『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1996 『泉山遺跡』
- 青森県教育委員会 1999 『十腰内（1）遺跡』
- 青森県教育委員会 2001 『十腰内（1）遺跡』
- 佐藤伝蔵 1901 「亀ヶ岡より出る青玉の原石産地」『東京人類学会雑誌』16-176
- 札幌医科大学解剖学第二講座 1987 『高砂貝塚』
- 三厩村教育委員会 1996 『宇鉄遺跡』
- 若林勝那 1896 「石器時代ノ土器ニ入りシモノハ何力」『東京人類学会雑誌』12-128